

記号：各条件に照らし、○適当、×不適當、△中間的なものを表わす。

各条件との関連		経済性	検索の便	出納方法	共同利用の便・効果	書庫スペースの有効利用	長期計画との関連
移管 (供用換え)方式	バックナンバー	△ 移管に当って会計帳票の訂正を必要とするが、所蔵記録は冊子目録の改訂で済む。経費は80万冊の再整理に約500万円。	○ 冊子目録の改訂により容易に検索できる。	○ 本館の職員が行う。	○ 体系的で完全なセットの維持・網羅性から、非常に大きい。	○ 重複資料の整理が容易で非常に有効。	○ 長期的に一貫した方針がとれ、大きな効果が望める。
	単行書	× 会計帳票の訂正、全学総合目録・部局用目録の訂正に多額の経費を要する。80万冊を部局から中央館へ移管するには(500円/冊として)中央館で4億円、部局図書室で4億円、合計8億円の総費を要する。	○ 全学総合目録・部局用目録を訂正すれば容易に検索できる。	○ 同上	△ 収納される図書に体系性がなく、バックナンバーに比べて劣る。	△ 重複資料の整理に多額の経費と労力を要する。	△ 収納される資料に一貫性が乏しく、継続による効果は少ない。
貸棚方式	バンパクナ	○ 資料の運搬に要する経費のみで、最も軽微。	× 所蔵記録と実際の配置場所が異なり、検索は極めて不便。	× 各部局の職員がそれぞれ行なう。長期の間には管理の混乱が生じる。	× なし	× 重複資料の除籍もなく、利用スペースは大巾に減少。	× なし
	単行書	○ 同上	× 同上	× 同上	× 同上	× 同上	× 同上

4. ま と め

上述の通り、中央館のバックナンバー・センターと、各部局に配置し部局ごとに単行書を収納する集密書架とは、互いに相補って、はじめて本学の教育・研究体制に望ましい資料配置を可能にする。

本学には、和雑誌(11,500種)、洋雑誌(14,500種)、合計26,000種の学術雑誌の長年にわたる蓄

積があり、質・量ともに、国内屈指のコレクションである。この体系的かつ網羅的なバックナンバー・センターの設置は、ひとり学内に止まらず、広く全国的規模においても、その研究活動への貢献は計り知れない。このように考えれば、本計画におけるバックナンバー・センターの実現の意義は、まことに大なるものがある。

新館への移転計画について

附属図書館では、本年10月に予定どおり新館の竣工を迎えることになった。

この新館の完成に伴い、これまで5か所に分散していた事務室をできるだけ早期に新館に移転させ、開館準備を急ぐことにしたいと考えている。しかし、旧館の約3倍の面積をもつ大規模な図書館となり、これまでになかった施設、設備が設け

られてその機能も一新するので、内部整備に約4か月を要するものと思われる。また、開館と同時に閲覧・貸付業務を電算化することに伴い、各種の準備作業が輻輳すること等により、利用者各位の利用に供しうる態勢を整えるには相当の日時を要する。殊に、毎年約3000名の学生が開架閲覧室の利用状況からみて、学年末試験のほぼ終了する時点まで

開架閲覧室（法経第一教室）を開いておく必要がある。

このような事情により、附属図書館では、本年10月20日（木）に予定されている竣工検査のあと直ちに新館の引渡しがなされるものとして、下記のとおり第1次と第2次に分けて移転することを計画している。今後の工事の進捗状況その他により、移転日等について若干変更することもあります。あらかじめ御了知ください。

記

1 事務室等移転の日程

A 第1次移転

昭和58年11月4日（金）

○ 閲覧課

法経本館 2階

附属図書館別館 3階 } → 新館 1階, 3階
尊攘堂

○ 雑誌室

附属図書館別館 3階 → 新館 3階（特殊資料室）

○ 総務課用務員室

尊攘堂 → 新館 1階

昭和58年11月5日（土）

○ 館長室、事務部長室、総務課

理学部 1号館 3階 → 新館 4階

昭和58年11月7日（月）

○ 整理課

理学部 1号館 4階 → 新館 3階

B 第2次移転

昭和59年2月20日（月）—23日（木）

○ 開架閲覧室

法経第一教室 → 新館 2階

2 カード目録の移転

A 第1次移転

昭和58年11月4日（金）

○ 昭和23年以降の全学総合目録（和漢書著者名カード）

尊攘堂 → 新館 1階

昭和58年11月5日（土）

○ 全学総合目録（和漢書書名カードおよび洋書著者名カード）

理学部 1号館 4階（整理課） → 新館 1階

（上記いずれも利用は11月9日（水）からの予定）

B 第2次移転

昭和59年2月20日（月）

○ 附属図書館分類目録（和漢書・洋書カード）

法経第一教室（開架閲覧室） → 新館 1階

3 図書その他の資料の移転

A 第1次移転

(1) 梱包図書

昭和58年11月7日（月）—11月12日（土）

○ 教養部図書室地下荷解室ほか2か所（約120,000冊） → 新館地下2階

(2) 雑誌

昭和58年11月4日（金）

○ 附属図書館別館（約2,000冊） → 新館 3階（特殊資料室）

(3) 配架図書

昭和58年11月7日（月）—11月12日（土）

○ 附属図書館旧書庫の稀用図書（約2,300冊）および標本等 → 新館地下2階

○ 人文科学研究所倉庫（H R A F） → 新館 3階特殊資料室

B 第2次移転

(1) 開架図書

昭和59年2月20日（月）—23日（木）

○ 開架閲覧室（法経第一教室）

参考図書（約8,000冊） → 新館 1階

開架図書（約28,000冊） → 新館 2階

(2) その他の図書

昭和59年2月23日（木）—3月10日（土）

○ 附属図書館旧書庫、法経北館書庫ほか4か所（約360,000冊） → 新館 2階、地下1階、同2階

4 臨時休館日

(1) 昭和58年10月28日（金）から11月7日（月）まで

事務部の移転準備および移転のため

(2) 昭和58年12月12日(月)から12月24日(土)まで

閲覧業務電算化に伴い、開架閲覧室(法経第一教室)、附属図書館旧書庫その他の図書(約70,000冊)への図書コード用ラベルの貼付、ブックディティクション・システムの採用によるタトルテープの装着作業等のため

(3) 昭和59年2月20日(月)から3月31日(土)日まで

開架閲覧室および蔵書360,000冊移転並びに蔵書の配架整理、開館準備のため
附属図書館では以上のような日程で、細部にわたる移転計画を樹て、明年4月開館を目指して鋭意努力する所存である。

附属図書館の図書分類の変更について

附属図書館では、明治32年の創設以来、本館独自の分類表である「京都(帝国)大学附属図書館和漢書分類表」および同「洋書分類表」を使用してきたが、学術研究の急速な発展に伴う学問分野の新設や分化・統合のため、この分類表では図書を適切に分類することが次第に困難となった。このため、過去、数回にわたり改訂を行ってきたが、部分的な改訂には限度があり、抜本的な見直しが必要になった。

本館の新営を機に、業務全般の見直し、電算機の導入など、将来における図書館活動のあり方についての検討を行なうに際しても、分類表の変換が重要な課題の一つとなり、附属図書館の施設・サービス委員会での検討を経て、新しく国立国会図書館(NDL)の分類表を採用することとなった。

委員会での審議に当って、近い将来に実施される予定の、目録業務の電算化にそなえ、比較検討の対象を、日・米の代表的な機械可読目録(MARC)に使用されている、日本十進分類表(NDC)、国立国会図書館(NDL)分類表、デュイ十進分類表(DC)米国議会図書館(LC)分類表の四つにしばった。このいずれかを選定することによって、日常業務における分類作業の軽減がはかられることがその理由である。

NDC、DCは十進分類、NDL分類表、LC分類表は非十進分類である。

検討の過程で、あらゆる分野にわたる専門図書

を十進法によって分類すること自体に無理があるとして、NDCとDCをまず除外し、NDL分類表、LC分類表の二つについて更に比較検討した。LC分類表は過度に詳細であるため、かえって展開性に乏しく運用上に問題があること、および和漢書の占める比率の高い本館に向かないことを理由にNDL分類表を採用することとなった。

NDL分類表の採用を決定するに至った主な理由は、次のとおりである。

① NDCは、現在第8版となっていることから判るように、約10年ごとに大幅な改訂がなされているが、改訂によって体系自体の変更が生じ、実務上様々な障害となること、またNDCの管理、編集の責任体制が不明確であり将来性に問題があること。

② NDL分類は、アルファベット1~2文字と数字1~4桁を使用する点に特色がある。このアルファベット1~2文字(AA~ZZ)だけで676通りの分類が可能であり、(因みに数字2桁では99通り)、それに数字を適宜加えることにより短い記号で詳細な分類が行なえる。さらに新しい項目の追加も自在となる。

上記の決定にしたがい、昭和58年1月以降の受入図書から和・洋ともにNDLによる分類に切り替えを行なった。

新旧の分類によるラベルの相異は、例えば、次の通りである。